女子大学生の自己受容を測定する(2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4590

女子大学生の自己受容を測定する（2）

川上　正浩
臨床心理学専攻教授

要約
川上（2017）は，複数の自己受容尺度を統合して包括的な自己受容尺度を構成し，因子分析を経たうえで，信頼性が高く，コンパクトで包括的な自己受容尺度を提案することを目的とし，238 名の女子大学生を対象にデータを収集した。このデータに基づき，川上（2017）は，「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット希求のなさ」「自己価値」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の 6 因子が抽出され，さらに，これらに対応する下位尺度を構成する全 17 項目からなるコンパクトな自己受容尺度を提案した。一方，山田・岡本（2006）は，客観的な評価や自己認知は，自己受容の前提にあると考え，客観的な他者との比較によるような自己評価のニュアンスを含まない，自己による自己受容を測定している。本研究では，川上（2017）が作成した自己受容尺度（短縮版）と，山田・岡本（2006）による「自己による自己受容」との相関を吟味することにより，川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）について，その妥当性を検討した。その結果，妥当な方向の相関関係が認められ，川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）の妥当性が認められた。

キーワード：自己受容，測定尺度，短縮版，女子大学生

問題と目的

自己受容は心理臨床において重要な概念の一つであり（春日，2015），“カウンセリングを受けるクライエントの達すべき目標の一つ”（菱田，2002），あるいは，成熟したパーソナリティや心理的健康の一指標（板津, 1994;春日, 2015;鈴木，2010）ともされている。

自己受容そのものが，思春期（たとえば粟谷・本間，2009）や青年期（たとえば上村，2007）において重要であることはもちろんであるが，その定義そのものについては，かなり広がりを持っている。自己受容は端的に言えば“自己を受け容れること”ではあるものの，認知を含めるのか否か，良い・悪いの評価についてどのように扱うのか，といった様々な点において，研究者によりその見解が異なっている。このため，自己受容の尺度については，多くの研究者により尺度が提案され，使用されている（たとえば藤川・大本，2015；藤原・菅原，2010；宮沢，1987 など）。

そこで川上（2017）は，自己受容を，「良い面も悪い面も含めて，自己のありのままを受け容れ，自己を信頼していること，またそうしようとしていること」としたうえで，複数の自己受容尺度を統合して包括的な自己受容尺度を構成することを意図し，質問紙調査を実施した。藤原・菅原（2010），櫻井（2013），藤川・大本（2015），森下・三原（2015），笹川（2015）の 5 つの尺度を構成する項目，計 59 項目を 1 つの質問紙として構成し，238 名の女子大学生を対象にデータを収集した。因子分析の結果，「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット

希求のなさ」「自己価値」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の 6 因子が抽出された。さらに，川上（2017）は，この包括的な自己受容尺度を，できるだけコンパクトな項目で構成し，測定が簡便に行える尺度として提案することを目的とし，より少ない項目での尺度構成を行なった。その結果，川上（2017）では，上記 6 因子に対応する下位尺度を構成する全 17 項目からなるコンパクトな自己受容尺度（短縮版）が提案された。

「弱みのある自分の受け容れ」は，「現在の自分を受けいれている」，「自分の弱いところも自分の一部として認めることができる」，「私は平凡かもしれないがそんな自分を好きだと思える」の 3 項目からなり，弱い部分を認識したうえで，これを含めて自己受容を行う態度に関わる尺度である。「強みのある自分の受け容れ」は，「私は自分の長所がわからない（逆転）」，「自分の優れている部分を受けいれている」，「私には人に誇るものが何もない（逆転）」の 3 項目からなり，自分の良いところ，強みを認識したうえでの自己受容を行う態度に関わる尺度である。「リセット希求のなさ」は，「私は自分とは違うだれか別の人になりたい（逆転）」，「『今とは違う自分だったらなぁ』と思う（逆転）」，「これまでの人生をやり直したい（逆転）」の 3 項目からなり，自分をリセットしたうえで新しい自分になることを希求しない態度に関わる尺度である。「自己価値の肯定」は，「私は生きていても仕方がない（逆転）」，「私は生きる価値のない人間である（逆転）」，「私は生まれてこない方がよかった（逆転）」の 3 項目からなり，自分の価値を認めることに関わる尺度である。「自律性の受け容れ」は，「私は自分のことは自分で解決する」，「私は困難にぶつかってもそれを克服できる」，「私は自分で決めたことには責任をもつ」の 3 項目からなり，自己の行動に対して自律的に振る舞うことに関わる尺度である。「対処能力への自信」は，「私は将来何が起ころうと自分なりにやっていける」，「将来何か問題が起こったとしても，何とか対処していけるという自信がある」の 2 項目からなり，自己の課題解決能力に対する自信に関わる尺度である。

本研究では，この川上（2017）が提案する自己受容尺度（短縮版）の妥当性を検証することを目的に，同時に測定される既存の自己受容を測定する尺度との関連について検討を行う。これまで複数の研究者により自己受容の測定尺度が開発され，実証的な研究も行われてきているが，研究者により自己受容の定義が一貫しないことや，このために測定内容が異なることも指摘されている（たとえば春日，2015；鈴木，2010）。

たとえば春日（2015）は，自己受容を，「ありのままの自己を，「その時点で」「どの程度」受け入れているかといった状態についての認識を意味するのではなく，ありのままの自己を受け入れようとする自己に対する「態度」や「姿勢」，またはその「過程」を意味している」（p. 20）とし，自己受容をプロセスや態度として捉えている。さらに，自己受容とは「自己のそれぞれの側面がどのようなものであるにしても，それらをまとめた自己を全体として，善悪の判断ではなく，好き嫌いなどでもなく，ただ素直に「今の自分はこうなのだ」と暖かく受け止めようとする姿勢であり，それは意識ではなく，感情や感覚である」（p. 20）ともしている。こうした意味では自己受容は，自己認識が客観的に見て正しいか否か，あるいは，その個人の特性を肯定的に捉えているか否定的に捉えているかにかかわりなく，それを嫌いではないと受け入れる感覚だと言える（山田・岡本，2006）。これは，松本・小山（2009）が，自己受容を「良い・悪いに関係なく，それを事実としてありのままの自分を受け容れる感覚」（p.75）と定義し，個人のある属性に対する認知が肯定的であるか否定的であるかにかかわらず，属性そのものを個人が受け容れているのかどうかのみを取り扱う，としていることにも通じる。

このように春日（2015）が自己を「それぞれの側面がどのようなものであるにしても，それらをまとめた自己を全体」（p. 20）として捉えることを重視しているのに対して，山田・岡本（2006）は，自己受容は具体的な領域ごとに捉えること

を重視している。山田・岡本（2006）は，板津（1989）が，因子分析的な手法によって，自己受容を構成する因子を抽出し，そのバランスを数量化して扱っていることや，伊藤（1992）がYG性格検査を用いて行なった研究において，大学生の自己受容には性格の受容が特に重要な位置を占めているとしていることなどから，大学生の自己受容が性格を含めて，どのような因子から構成されるのかを因子分析的な手法を用いて検討した。その結果，山田・岡本（2006）は，「志向性（優しさ，考え方，生き方）」「対人性格（積極性，明るさ，協調性・社交性）」「身体魅力（性的能力（魅力），体つき，顔立ち）」「状態（経済状況，知的能力・教養）」の4つの領域，あるいは，「状態」を除いた3つの領域ごとの自己受容因子を想定している。

以上のように，自己受容の捉え方については，全体的なものであるとする立場と，領域に依存したものであるとする立場とが併存している。そこで本研究では，川上（2017）において校正された自己受容尺度（短縮版）と具体的な領域ごとに，客観的な評価を問わない，自己による自己受容（山田・岡本，2006）との間の関係について吟味することを通して，川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）の妥当性を検証する。さらに，全体的な自己受容を測定する川上（2017）の自己受容尺度と，領域ごとに測定を行う山田・岡本（2006）の尺度との関係を詳細に吟味することにより，女子大学生の自己受容について知見を加えることを第二の目的とする。

本研究においても，具体的な領域ごとの，自己による自己受容としては，山田・岡本（2006）が用いている，「体つき」などの領域を指定したうえで，「それではまったくいやだ，気に入らない」から「それでまったく良い，そのままでかまわない」の5件法で，自己受容について測定する方法をそのまま使用する。

方法

調査時期

調査は2016年1月から5月に実施された。

調査対象者

大阪樟蔭女子大学に所属する大学生238名（平均年齢19.0歳，SD = 1.18）が調査に参加した。この調査対象者は，川上（2017）と同一の対象者である。

質問紙の構成

複数の自己受容尺度（藤原・菅原，2010，櫻井，2013，藤川・大本，2015，森下・三原，2015，笹川，2015）を組み合わせ，59項目からなる自己受容測定尺度が作成され，5件法（1：まったくあてはまらない～5：非常によくあてはまる）にて，調査対象者の反応が求められた。これら59項目のうち，川上（2017）の分析結果に基づき，「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット希求のなさ」「自己価値の肯定」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の6つの下位尺度（合計17項目）からなる，自己受容尺度（表1）を構成し，分析に用いた。

また，山田・岡本（2006）が用いた，自己による自己受容に関する15項目を用いて（表2参照）自己による自己受容について，5件法（1：それではまったくいやだ，気に入らない～5：それでまったく良い，そのままでかまわない）で測定を行なった。これら15項目は，山田・岡本（2006）が板津（1989），伊藤（1991），沢崎（1993）の尺度項目を比較し，身体的能力2項目，外見2項目，性格8項目，状態3項目の4領域から選択したものである。

結果と考察

川上（2017）の結果に倣い，「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」「リセット希求のなさ」「自己価値の肯定」「自律性の受け容れ」「対処能力への自信」の6つの下位尺度得点を算出した。各下位尺度の信頼性を検討す

るため，Cronbach の α 係数を算出したところ，「自律性の受け容れ」（α = .691）については，.70 に届かなかったが，「弱みのある自分の受け容れ」（α = .849），「強みのある自分の受け容れ」（α = .836），「リセット希求のなさ」（α = .732），「自己価値の肯定」（α = .942），「対処能力への自信」（α = .816）については．70以上の数値が得られた。下位尺度ごとの平均値および標準偏差を表 3 に示した。

表 1　自己受容尺度（川上，2017）の下位尺度とその項目

下位尺度	項目
弱みのある自分の受け容れ	現在の自分を受けいれている
	自分の弱いところも自分の一部として認めることができる
	私は平凡かもしれないがそんな自分を好きだと思える
強みのある自分の受け容れ	私は自分の長所がわからない（逆転）
	自分の優れている部分を受けいれている
	私には人に誇るものが何もない（逆転）
リセット希求のなさ	私は自分とは違うだれか別の人になりたい（逆転）
	「今とは違う自分だったらなぁ」と思う（逆転）
	これまでの人生をやり直したい（逆転）
自己価値の肯定	私は生きていても仕方がない（逆転）
	私は生きる価値のない人間である（逆転）
	私は生まれてこない方がよかった（逆転）
自律性の受け容れ	私は自分のことは自分で解決する
	私は困難にぶつかってもそれを克服できる
	私は自分で決めたことには責任をもつ
対処能力への自信	私は将来何が起ころうと自分なりにやっていける
	将来何か問題が起こったとしても，何とか対処していけるという自信がある

本研究の対象者においては，「リセット希求のなさ」の平均得点が，中点である 3.0 を切っていること，逆に，「自己価値の肯定」の平均得点は，4 .0 に近いことが示され，またそれ以外の下位尺度得点については，中点である 3.0 に近い値を取っていることが示された。

また，山田・岡本（2 006）が用いた，自己による自己受容に関する 15 項目について，それぞれの項目の平均値および標準偏差を算出した。これらを表 4 に示した。

個々の項目における満足度と自己受容尺度との相関

自己受容尺度 6 下位尺度（川上，2017）と山田・岡本（2 006）の自己による自己受容に関する 15 項目との相関係数を算出した（表 5）。その結果，

表 2　自己による自己受容（山田・岡本，2006）の項目

領　域	項目
身体的能力	運動能力・身体能力
	性的能力（魅力）
外　見	顔立ち
	体つき
性　格	明るさ
	優しさ
	真面目さ
	協調性・社交性
	積極性
	情緒安定度
	考え方
	生き方
状　態	経済状況
	健康状態
	知的能力・教養

「自律性の受け容れ」と「健康状態」との間には有意な相関が認められなかった（r = .080，n.s.）が，それ以外の組み合わせについては，すべて有意な正の相関が認められた。すなわち，本研究で用いている自己受容尺度は，山田・岡本（2006）による自己による自己受容を予測しうるものであることが示された。組み合わせによっては，相関が比較的低い（r = .150 程度）ものもあるが，特に「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」が，「優しさ」「考え方」「生き方」といった山田・岡本（2006）のいう「志向性」と高い相関を示していることが顕著である。また，「弱みのある自分の受け容れ」「強みのある自分の受け容れ」の 2 下位尺度については，その他の自己による自己受容との相関が比較的高いことも注目に値する。一方で，「自律性の受け容れ」については，「志向性」とは比較的高い相関を示しているものの，それ以外との相関は比較的低い。

また，自己による自己受容のうち，「体つき」は，どの自己受容下位尺度との相関も比較的低かった。

表 3　自己受容尺度（川上，2017）の下位尺度得点

下位尺度	平均値	標準偏差
弱みのある自分の受け容れ	3.29	0.88
強みのある自分の受け容れ	3.07	0.98
リセット希求のなさ	2.63	1.02
自己価値の肯定	3.91	1.14
自律性の受け容れ	3.27	0.79
対処能力への自信	3.24	0.99

表 4　自己による自己受容（山田・岡本，2006）の項目得点

項　目	平均値	標準偏差
運動能力・身体能力	2.54	1.23
性的能力（魅力）	2.44	0.97
顔立ち	2.25	0.99
体つき	2.18	1.05
明るさ	3.37	1.12
優しさ	3.30	1.01
真面目さ	3.24	1.08
協調性・社交性	3.18	1.19
積極性	2.80	1.12
情緒安定度	2.68	1.14
考え方	2.98	1.08
生き方	3.00	1.10
健康状態	3.21	1.25
経済状況	2.69	1.15
知的能力・教養	2.40	1.05

山田・岡本（2006）の自己による自己受容尺度の因子分析

先述のように，山田・岡本（2006）は，その報告の中で，自己による自己受容に関する 15 項目に対して因子分析を実施し，「志向性」「対人性格」「身体魅力」「状態」の 4 因子解を得ている。本研究において，これらの下位尺度の信頼性を検討するため，Cronbach の α 係数を算出したところ，「志向性」（α = .724），「対人性格」（α = .771），「身体魅力」（α = .672）については，.65 以上の数値が得られたが，「状態」（α = .566）についてはやや不十分な値であった。この背景には，山田・岡本（2006）で分析されたデータが，男女両方のものであったのに対して，本研究の調査対象者が女子大学生に限られていたことがあるのかもしれない。

そこで本研究ではこれら 15 項目に対し，あらためて最尤法，プロマックス回転による因子分析を実施した。項目や因子の解釈可能性や，どの因子にも因子負荷量が｜ .35 ｜未満であること，複数の因子に対して負荷量が｜ .35 ｜以上であることなどを考慮して，項目の削除を行いながら因子分析を繰り返し，最終的に 4 因子を抽出した（表 6）。

第一因子は性的能力（魅力），体つき，知的能力・教養，経済状況，顔立ちの 5 項目に負荷量が高く，山田・岡本（2006）の身体魅力と状態を併せた因子であると言える。これらは比較的外見としてあるいは客観的に確認可能な性質であると考えられ，これを「スペック」と命名した。第二因子は，

表 5　自己受容尺度（短縮版）と自己による自己受容（山田・岡本，2006）項目との相関

項　目	弱みのある自分の受け容れ	強みのある自分の受け容れ	リセット希求のなさ	自己価値の肯定	自律性の受け容れ	対処能力への自信
運動能力・身体能力	.303 **	.376 **	.285 **	.370 **	.309 **	.231 **
性的能力（魅力）	.345 **	.310 **	.376 **	.146 *	.205 **	.199 **
顔立ち	.349 **	.355 **	.390 **	.323 **	.180 **	.219 **
体つき	.180 **	.136 *	.287 **	.144 *	.191 **	.165 *
明るさ	.382 **	.388 **	.268 **	.408 **	.170 **	.279 **
優しさ	.452 **	.487 **	.281 **	.399 **	.269 **	.286 **
真面目さ	.298 **	.266 **	.286 **	.220 **	.282 **	.213 **
協調性・社交性	.322 **	.309 **	.313 **	.368 **	.225 **	.284 **
積極性	.264 **	.434 **	.337 **	.271 **	.178 **	.317 **
情緒安定度	.444 **	.318 **	.269 **	.367 **	.263 **	.302 **
考え方	.471 **	.439 **	.443 **	.284 **	.325 **	.364 **
生き方	.552 **	.509 **	.446 **	.430 **	.331 **	.433 **
健康状態	.280 **	.151 *	.177 **	.302 **	.080	.215 **
経済状況	.237 **	.219 **	.220 **	.206 **	.187 **	.160 *
知的能力・教養	.342 **	.304 **	.281 **	.245 **	.245 **	.229 **

**p <.01　*p <.05

明るさ，協調性・社交性，積極性の 3 項目に負荷量が高く，山田・岡本（2006）と同一の因子である。したがって山田・岡本（2006）同様，「対人性格」と命名した。第三因子は，考え方，生き方，優しさ，真面目さの 4 項目に負荷量が高く，山田・岡本（2006）のいう「志向性」に近いことから，本研究においても「志向性」と命名した。第四因子は，情緒安定度，健康状態の 2 項目に因子負荷量が高く，「安定性」と命名した。

山田・岡本（2006）は因子分析的な手法を用いて，大学生の自己受容を，その具体的な領域ごとに区別しようとしたが，本研究における因子分析の結果は，調査対象者が女子大学生に限られていたものの，ほぼ彼女らの結果に倣うものとなった。差異としては，山田・岡本（2006）では，「状態」として独立した因子となった経済状況と知的能力・教養とが，山田・岡本（2006）の「身体魅力」（性的能力（魅力），体つき，顔立ち）とまとまって単一の因子を構成したことと，本研究では新たに，「安定性」（情緒安定度，健康状態）の因子が抽出されたことである。前者については，「状態」の α 係数が .566，「身体魅力」の α 係数が .672 である一方で，これらを合わせた「スペック」の α 係数が .763 であることからも「スペック」としての測定が妥当である可能性が示唆される。一方の「安定性」が抽出されたことについては，山田・岡本（2006）では剰余項目として扱われていた 2 項目であることや，その α 係数が .592 であることを踏まえると，それほど頑健な因子ではない可能性もある。しかしながら，後述のように，この「安定性」については，川上（2017）の自己受容尺度との相関関係において，注目すべき点があると考えられ，今後より詳細に検討を加えていく必要が感じられる因子である。

自己による自己受容尺度の下位尺度と自己受容尺度との相関

山田・岡本（2006）に基づく 4 因子解と，本研究の因子分析結果に基づく 4 因子解とのそれぞれで，下位尺度得点を算出し，それぞれの下位尺度得点の平均値および標準偏差を算出した。これらを表 7，表 8 に示した。さらに，これらの下位尺度得点と自己受容尺度との相関を算出し，表 9，表 10 に示した。

表 6　自己による自己受容（山田・岡本，2006）の因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
第Ⅰ因子：スペック（α = .763）				
性的能力（魅力）	**.745**	.009	.056	-.021
体つき	**.652**	-.085	-.071	.019
知的能力・教養	**.547**	-.089	.276	-.047
経済状況	**.512**	-.027	-.017	.150
顔立ち	**.481**	.105	.048	.117
第Ⅱ因子：対人性格（α = .771）				
明るさ	.086	**1.003**	-.244	.023
協調性・社交性	-.237	**.604**	.318	.014
積極性	-.016	**.569**	.231	-.070
第Ⅲ因子：志向性（α = .739）				
考え方	-.072	-.010	**.676**	.129
生き方	.191	.101	**.553**	.084
優しさ	.163	.162	**.459**	-.018
真面目さ	.301	-.038	**.430**	-.196
第Ⅳ因子：安定性（α = .592）				
情緒安定度	-.029	-.065	.131	**.968**
健康状態	.230	.106	-.113	**.372**
因子間相関	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	—	.313	.573	.304
Ⅱ		—	.357	.314
Ⅲ			—	.418
Ⅳ				—

表 7　山田・岡本（2006）による自己による自己受容下位尺度得点

下位尺度	平均値	標準偏差
志向性	3.09	0.85
対人性格	3.12	0.95
身体魅力	2.29	0.78
状態	2.55	0.88

表 8　本研究の因子分析結果に基づく自己による自己受容下位尺度得点

下位尺度	平均値	標準偏差
志向性	3.13	0.80
対人性格	3.12	0.95
スペック	2.39	0.75
安定性	2.94	1.01

表 9 においても，表 10 においても，すべての組み合わせにおいてその相関係数は 1%水準で有意となり，本研究における自己受容尺度と，山田・岡本（2006）の自己による自己受容との間には,明らかな相関関係があることが見て取れる。中でも，本研究における「志向性」は，自己受容尺度のすべての下位尺度と .40 以上の相関係数を示し，強い関連を持っていることがうかがえる。特に,「志向性」が「弱みのある自分の受け容れ」や「強みのある自分の受け容れ」と強い相関を示していることが特徴的である。

そして,「弱みのある自分の受け容れ」と「強みのある自分の受け容れ」は,「安定性」以外の山田・岡本（2006）の自己による自己受容の下位尺度と概ね同程度の強さの相関を示しているが,「安定性」に関しては,「弱みのある自分の受け容れ」とより強い相関を示していることが注目に値する。すなわち，自分の安定性を受け容れている人ほど，弱みのある自分を受け容れていることが示されており，これは現代の女子大学生が自らの安定性（がないこと）について，重要な弱みと捉えていることを表しているのではないかと考えられる。特に今回，山田・岡本（2006）で使用された項目と同一の項目に対して行われた因子分析において,安定性の因子が抽出されたことは,現代の女子大学生にとって，身体化の問題を伴う精神的な安定性が，その自己受容に大きな影響を与えていることをうかがわせる。さらに，それが自己の弱みとして認識される可能性が本研究における相関関係から示唆される。

一方で，山田・岡本（2006）の自己による自己受容は，川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）とすべての組合せで有意な正の相関を示していることは重要な結果であると思われる。先述のように，山田・岡本（2006）は因子分析的な手法を用いて，大学生の自己受容を，その具体的な領域ごとに区別しようとしたが，どの領域についても川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）は，その傾向を一定の確率で予測可能であることを示していると考えられるからである。すなわち川上（2017）の自己受容尺度（短縮版）は，領域を問わず，大学生の自己受容について妥当に測定する尺度であると考えることができる。

本研究の結果を踏まえて，川上（2017）で作成した尺度を，その妥当性が検証されたと考え，改めて自己受容尺度（SACCS: Self Acceptance

表 9　山田・岡本（2006）による自己による自己受容下位尺度と自己受容尺度との相関

下位尺度	弱みのある自分の受け容れ	強みのある自分の受け容れ	リセット希求のなさ	自己価値の肯定	自律性の受け容れ	対処能力への自信
志向性	.614	.594	.489	.461	.385	.452
対人性格	.390	.450	.366	.421	.232	.352
身体魅力	.371	.340	.450	.262	.247	.249
状態	.355	.323	.311	.280	.267	.240

all *p* s < .01

表 10　本研究の因子分析結果に基づく自己による自己受容下位尺度と自己受容尺度との相関

下位尺度	弱みのある自分の受け容れ	強みのある自分の受け容れ	リセット希求のなさ	自己価値の肯定	自律性の受け容れ	対処能力への自信
志向性	.592	.566	.488	.444	.403	.434
対人性格	.390	.450	.366	.421	.232	.352
スペック	.400	.366	.429	.296	.281	.270
安定性	.425	.273	.261	.394	.202	.304

all *p* s < .01

Compact and Comprehensive Scale）として提案する。今後，本尺度を用いて女子大学生の自己受容について，さらに詳細な検討を行っていくことや，男子大学生についてもデータを収集することにより，SACCS が女子大学生に特化した尺度であるのか，男女共通で適用可能な尺度であるのかについて検討を行うことが望まれる。

引用文献

粟谷初子・本間友巳 (2009). 思春期の自己肯定感のあり方に影響を及ぼす要因について―学校生活適応感，生活習慣との関係を中心に―． 京都教育大学教育実践研究紀要，**10**，193-202.

藤川順子・大本久美子 (2015). 高校生の自己受容・他者受容と親との関わりの関連． 大阪教育大学紀要第 4 部門教育科学，**64**，81-92.

藤原梢・菅原正和 (2010). 理想 - 現実自己の齟齬と自己受容の心理学． 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，**9**，125-140.

菱田陽子 (2002). 現代青年の自己受容に関する分析． 北陸学院短期大学紀要，**34**，179-196.

板津裕己 (1989). 自己受容尺度短縮版（SASSV）作成の試み． 応用心理学研究，**14**，59-65.

板津裕己 (1994). 自己受容性研究の発展（1）―評定法を中心とした自己受容性測定法の整理―． 駒沢社会学研究，**26**，1-30.

伊藤美奈子 (1991). 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的変化―2 次元から見た自己受容発達プロセス―． 発達心理学研究，**2**，70-77.

伊藤美奈子 (1992). 自己受容と性格特性との関連についての一考察． 心理学研究，**63**，205-208.

春日由美 (2015). 自己受容とその測定に関する一研究． 南九州大学人間発達研究，5，19-25.

川上正浩 (2017). 女子大学生の自己受容を測定する． 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要，**11**, 27-39.

松本淳子・小山真理 (2009). 青年期女子における自己受容についての一考察－コラボレーション授業でのワークを通して－． 文化女子大学紀要　人文・社会科学研究，**17**，71-90.

森下正康・三原まどか (2015). 親しい人との愛着関係が対人不安に与える影響：内的作業モデルと自己受容を媒介として． 発達教育学研究：京都女子大学大学院発達教育学研究科博士後期課程研究紀要，**9**，31-42.

櫻井英未 (2013). 女子大学生の自己受容および他者受容と精神的健康の関係． 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要，**19**，125-142.

笹川果央理 (2015). 自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討―自己価値の随伴性から． パーソナリティ研究，**24**，112-123.

沢崎達夫 (1993). 自己受容に関する研究（1）―新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討―． カウンセリング研究，**26**，29-37.

鈴木潤也 (2010). 自己受容概念の再考：「ありのまま」の自己受容についての検討． 青山心理学研究 , **10**, 49-61.

上村有平 (2007). 青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会志向性を指標として． 発達心理学研究，**18**，132-138.

山田みき・岡本祐子 (2006). 現代青年の自己受容―自己による自己受容と他者を通しての自己受容の観点から―． 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部，**55**，339-348.